校点『筆記律呂新書説』（附訓読）（一）

山 寺 三 知

はじめに

本稿は、江戸前期の儒者中村惕斎（二六二九―一七〇二、名は之欽、惕斎は号）が、南宋の儒者、蔡元定（一一三五―一一九八、字は季通、号は西山、元定は名）著『律呂新書』（一一八七年成立）に対して注した『筆記律呂新書説』を翻刻し、標点を施し、さらに訓読を付したものである。

蔡元定は、朱熹（一一三〇―一二〇〇）の弟子でありながら、朱熹から友とされた人物で、特に律曆象数の学に精通していた。^(一)彼の著『律呂新書』は、古の理想の音楽を実現するために、それまでの經書・史書・子書に散見される楽律資料を、数理的、ときには象数的な視点から整理・再検討した音楽理論書で、^(二)後世の楽律論に大きな影響を与えた。以後、明・清や朝鮮王朝・江戸期の日本において、多くの注釈書が編まれたが、^(三)そのみならず、蔡元定の説に対する批判も含め、それ以降の儒者の楽理研究において、彼の理論を踏まええないものはないと言つても過言ではない。その点、『律呂新書』は中国楽律論史上のメルクマール的存在と言える。

蔡氏の原書そのものは、すでに散逸してしまったが、元代には、黄瑞節（生没年不詳）編『朱子成書』（一三四一年成立）に、『太極図』（周惇頤撰、朱熹解）・『通書』（周惇頤撰、朱熹解）・『西銘』（張載撰、朱熹解）・『易学啓蒙』（張載撰、朱熹解）・『家礼』（朱熹撰）等とともに

に収載され、明代になると、永楽帝（在位一四〇二—一四二四）の勅命により国家事業として編纂された三大全の一つ『性理大全』（二四一五年成立）に、『朱子成書』の他の書とともに収められ、その後、『性理大全』が東アジアに流布するのに伴い、『律呂新書』も、中国本土のみならず、朝鮮王朝や江戸期の日本で広く読まれるに至った。

日本では、承応二年（一六五三）に『性理大全』の和刻本が、元禄十年（一六九七）には中村惕斎の句読による『修正律呂新書』が刊行され、それ以降、日本でも多くの注釈書が編まれるようになった。

中村惕斎は、朱子学を修め、伊藤仁斎（一六二七—一七〇五）と並び称された人物で、特に天文・地理・度量衡・音律等に精通し、四書五経ばかりでなく、『性理大全』所収の『太極図』・『通書』・『西銘』・『易学啓蒙』・『家礼』等とともに『律呂新書』にも注釈を施した。ここにとりあげる『筆記律呂新書説』がそれである。

本書は、刊行されず、写本のみが残されているが、正確な執筆年代は不明である。ただし、惕斎の弟子齋藤元成（生没年不詳）による『修正律呂新書』の跋文に「是を以て近歳惕斎先生仲君、慨然として古律中声の以て復た興るべきことを庶幾す。乃ち此の書を『性理大全』中に抽きて、其の謬誤を正し、其の闕脱を補ひて、之に訓点し、且たその未だ発せざる所を闡明し、其の未だ尽くざる所を論弁して、是れが為に別に書数編を筆記す（是以近歳惕斎先生仲君、慨然庶幾古律中聲之可以復興。乃抽此書性理大全中、正其謬誤、補其闕脱、而訓點之、且闡明所未發、論辨其所未盡、爲是別筆記書數編）」とあるのによれば、『修正律呂新書』刊行当時（一六九七年）、すでに本書の存在していたことを知る。

江戸初期の『律呂新書』に対する注釈書には、ほかに林鷲峰（一六一八—一六八〇）『律呂新書診解』（成立年代不明、写本）があり、それと『筆記律呂新書説』との前後関係については、俄かには論じがたいが、例えば、齋藤元成『楽律要覧』（一七〇七年成立、写本）や鈴木蘭園（一七四一—一七九〇）『律呂弁説』（一八一五年成立、刊本）等は、惕斎の論を踏まえて執筆され、これらの書が広く流布したことを勘案すると、江戸期における『律呂新書』の受容、そして楽律論の展開を考える際、惕斎の『筆記律呂新書説』が無視することのできない存在であることが確認されるのである。

さらに付け加えれば、中村惕斎の他の著書、『三器通考』・『律尺考驗』は、度量衡研究史上、一つの画期をなすものとされているが、この『筆記律呂新書説』もそれらと関連する内容を含んでおり、本書は度量衡研究においても参照すべき資料と言える。

また、思想史においては、中村惕齋の学問は、独創性には欠けるものの、朱子学の正確な把握に努めていたとされているが、却つてそのよ
うな点から、本書は、『律呂新書』の理解のために、参考にすべき価値を有していると考えられるのである。

以上のことから、『筆記律呂新書説』は、中村惕齋の学問を知るためのみならず、江戸期における『律呂新書』の受容や楽律論・度量衡研
究の展開を考える上で、また『律呂新書』そのものの内容を理解する上でも重要な資料と言え、よつて、ここに浅学菲才の身を顧みず、翻
刻・校点並びに訓読を行うこととした次第である。特に、校点は、日本の儒者による楽律研究の成果を、国外の同学諸氏の参考に供すること
を目的として行つたものである。諸賢の批正を乞い、今後、補訂を行つてゆきたい。

〔註〕

(一) 『宋史』卷四百三十四「蔡元定伝」に「朱熹の名を聞き、往きて之を師とす。熹、其の学を叩ひ、大いに驚きて曰はく、「此れ吾が老友なり、当に
弟子の列に在るべからず」と（聞朱熹名、往師之。熹扣其學、大驚曰、「此吾老友也、不當在弟子列。」）とあり、また、朱熹の「律呂新書序」（朱
子文集）卷四十四）にも「吾が友、建陽の蔡君元定、季通（吾友建陽蔡君元季通）」と見える。

(二) 朱熹「跋蔡神与絶筆」（『朱子文集』卷八十三）に「先人（蔡癸、字は神与。蔡元定の父）……博学強記にして、高簡廓落、……遂に易象・天文・
地理の三式の説に於いて、通ぜざる所無く、而して皆、能く其の得失を訂す。……季通は乃ち能く厥の志を今日に承け、学行の余、尤も律曆に遡
く、討論定著して、遂に一家の言を成し、千古の誤りをして、曠然として一たび新たならしむ。而して其の源流に遡りて、皆、明法有り（先人……
博学強記、高簡廓落、……遂於易象・天文・地理三式之説、無所不通、而皆能訂其得失。……季通乃能承厥志於今日、學行之餘、尤邃律曆、討論定
著、遂成一家之言、使千古之誤、曠然一新。而迺其源流、皆有明法）」と見える。

(三) 中国では、音楽学・音響学の観点から、『律呂新書』を取り上げた研究が多く、特に、蔡元定の調律理論である、所謂「十八調理論」に関心が集
中する傾向にある。一方、日本では、『律呂新書』の思想史上の位置づけを論じた研究が、以下のとおり、いくつか発表されている。

小島毅「宋代の楽律論」（東京大学東洋文化研究所『東洋文化研究所紀要』一〇九冊、一九八九年三月）

堀池信夫「中国音律学の展開と儒教」（東京大学中国学会『中国—社会と文化』六、一九九一年六月）

児玉憲明「律呂新書研究序説—朱熹の書簡を資料に成立の経緯を概観する—」（新潟大学人文学部『人文科学研究』第八〇輯、一九九二年一月）
堀池氏は、「彼の独創は、むしろ「天地の気をもって準となす」という程頤の思想や、「声音の道は天地と通ず」という張載の思想を承けて、これを
技術的に具体化した点にあった」（上掲論文一三〇頁）、「蔡元定の方法を全体的に統観するならば、限定された状況下において、哲学的な理念と技
術との結合を見事に果たしたものと、拍手に値するものであったといつてよいだろう」（上掲論文一三一頁）とし、理念と技術の結合という
点に、その価値を見出している。児玉氏は、「蔡元定の楽論はその術数的性格の濃い蔡氏の家学の一環としてとらえなければならぬであろう。今
日的な意味での「楽理」にのみ関心を集中するならば、『律呂新書』の真相を見失うことになる」（上掲論文七四頁）とし、『律呂新書』の術数的側

面の重要性を説いている。

また、児玉氏には、ほかにも次のような『律呂新書』に関する論考がある。先の児玉氏の論考とともに、『律呂新書』について専門的に扱った稀少かつ重要な研究である。

児玉憲明「『律呂新書』研究―「声氣之元」と「数」―」（新潟大学人文学部『人文科学研究』第九五輯、一九九八年一月）
 なお、児玉氏には、以下に示す、『律呂新書』に対する現代日本語訳の労作があり、現在、継続して公表されている。

児玉憲明「蔡元定律呂本原詳解」（新潟大学人文学部『人文科学研究』第一二五輯、二〇〇九年九月）

児玉憲明「蔡元定律呂證辨詳解（一）」（新潟大学人文学部『人文科学研究』第一三〇輯、二〇一二年三月）

（四）明・清、朝鮮王朝、江戸期における、『律呂新書』に対する注釈の種類については、拙稿「『律呂新書』校点札記（之一）―選訳版本、兼論版本系統」（中国浙江省文化芸術研究院『文化芸術研究』二〇〇九年第六期）を参照されたい。

（五）『性理大全』が『朱子成書』を底本として作成されたことについては、吾妻重二「性理大全の成立と朱子成書」（『名古屋大学中国哲学論集』第五号、二〇〇六年三月）に詳しい。

（六）『元禄太平記』巻七「今の学者を指折りてみる」に「其德行を比べては、伊藤は中村が上に立たん事かたく、的齋は源助が下に居ん事かたくなん覚えける。さて礼楽曆数に於いては、中村氏に及ぶ者なし」とある。

（七）『先哲叢談』巻四に「暢齋、凡そ学ぶ所通曉せざるは靡し。天文・地理・尺度量衡の類、皆能く之を究極す。而して尤も礼に達し。……又音律を審らかにす。其の發明する所の者、当世の達者と雖も、之に欽服す（暢齋凡所學靡不通曉。天文地理尺度量衡類、皆能究極之。而尤達于禮。……又審音律。其所發明者、雖當世達者、欽服之）」とある。

（八）なお、遠藤徹氏は、「徳川治宝の時代の音楽についての一試論」（国立歴史民俗博物館編『企画展示 楽器は語る―紀州藩主徳川治宝と君子の楽―』一般財団法人国立歴史民俗博物館振興会、二〇一二年、一三頁）において、中村暢齋を、江戸期の楽律研究史における火付け役として位置付けている。

（九）一ノ宮一男「江戸時代前期における度量衡研究」（日本科学史学会編『科学史研究』第Ⅱ期第一七卷（No.二二六）一九七八年夏、七四頁）では、「中村暢齋の研究は、これらの書（引用者注：林鷲峯『泣血余滴』（一六五二年成立）や中根元圭『律原発揮』（一六九二年成立）等）と同時代のものであると思われるが、確立された研究方法を持ち、独自の主張をしているのであるから、度量衡研究史上では中期に入ったとすべきであろう」と指摘されている。

（十）柴田篤・辺土名朝邦「中村暢齋・室鳩巢」（明徳出版社、一九八三年、一三三頁。該当箇所は、柴田氏による執筆）に、「朱子学に対して独創的解釈を施したり、そこから独自の思想を構築したりした学者ではなかった。しかし、むしろそこに彼の朱子学受容の一つの特色があったのではなからうか。……そこに朱子のような著々な著作を十分に読みこなし、その哲学体系を幅広くしかも正確に理解把握し、これを自らの言葉で多くの日本人になるべく平易に語り伝えようとした暢齋の苦心の跡を見ることができるといえる」と見える。

凡例

一、本稿の構成

1. 『筆記律呂新書説』には、『律呂新書』本文が収録されていない。よって『筆記律呂新書説』を掲載するに先立ち、『律呂新書』の本文を掲げた。その際、中村惕齋が校訂したとされる『修正律呂新書』を用いた。
2. 『律呂新書』と『筆記律呂新書説』それぞれを翻刻し、そこに標点を施し、校勘を行い、書き下し文を付した。その順は以下のとおりである。なお、〔註〕については、「凡例」の「七、出典考証について」において言及する。

『律呂新書』

本文——**修正律呂新書**と表示

校勘——〔校記〕と表示

書き下し文——〔訓読〕と表示

『筆記律呂新書説』

本文——**筆記律呂新書説**と表示

校勘——〔校記〕と表示

注——〔註〕と表示

書き下し文——〔訓読〕と表示

二、底本

1. 『律呂新書』

底本には、中村惕齋点・齋藤元成跋『修正律呂新書』（浪華書林、大坂柏原屋佐兵衛、元禄十年跋、刊本。「修正本」と略す）を用いた。

2. 『筆記律呂新書説』

後述のとおり、数種の写本の存在が確認されるが、それらのうち、来歴が比較的明らかであり、内容的にも誤りが少ないと思われる以下の写本を底本とした。

名古屋市蓬左文庫蔵、中村習齋（二七一九—一七九九）写本（「習本」と略す）

番号「中—二九五」 題簽「筆記律呂新書説」 印記「蓬左文庫」・「祖先親愛書至子孫愛護嚴禁典売」・「習齋」

また、習本における文字の不鮮明な個所については、習本の写しである以下の写本を参照した。

名古屋市蓬左文庫蔵、中村得齋（生没年不詳）編『道学資講』所収（「得本」と略す）

番号「四〇架一号三八二四一—三八二四三」 題簽「道学資講」 印記「尾府文庫図書」・「蓬左文庫」

ただし、習本・得本の間に、異なる場合には、これらを合わせて「蓬本」と称することとする。

三、翻刻の方針

1. 異体字等は、原則として、所謂正字に改めた。ただし、諸説あるものについては、一部、正字とされる字体に改めなかったものもある。
2. 字形に関して、厳密な区別を必要としないと判断したものについては、正字とされる字形に改めなかったものもある。

例…「音」は「音」とした。

3. 混用字（形近字）は、原則として、正しい字形に改めた。例…「巳」・「己」・「己」 「旦」・「且」

4. 段落分け・字下げ等は、原文を尊重しつつ、読みやすさを考慮し、適宜改めた。ただし、逐一注記しなかった。

5. 原文に見える小字双行注は、翻刻では、単行とし、本文よりもポイントを下げて記した。

6. 『筆記律呂新書説』の底本には、上欄に『修正律呂新書』やその他参考となる和刻本（『朱子文集』・『朱子語類』等）における、該当箇所の巻数・丁数が示されているが、それらについては、省略した。

7. 『筆記律呂新書説』の底本には、上欄や行間に書写者によるものと思われる注釈が見えるが、それらについては、校勘に関わるものを除き、墨付き括弧【 】に入れ、本文の該当箇所の前、或いは後に組み入れ、本文よりポイントを下げて記した。なお、校勘に関わるものに

については、「校記」に示した。

四、標点の方針

1. 標点については、中国で出版されている古典籍において一般に用いられる方式に従った。詳しくは、「古籍校点釈例（初稿）」（中華書局総編輯弁公室『書品』一九九一年第四期）を参照されたい。
2. 『律呂新書』の句読については、底本に付されたものを参考にし、可能な限り、中村惕斎の意に沿う形で施すように努めたが、底本は句点・読点の区別が厳密ではないこと、さらには本稿では中国の習慣に従って句読を切ったことにより、底本の句読と異なる個所がある。
3. 『筆記律呂新書説』の句読については、底本に読点のみが付されており、それらを参考にしたが、適宜改めた。

五、校記について

1. 『律呂新書』
 - (1) 『修正律呂新書』の跋文によると、修正本は、『性理大全』から抽出されたものである。よって『律呂新書』の本文については、『性理大全』との校勘も行った。対校本には、『性理大全』（済南・山東友誼書社、一九八九年。「性理大全」と略す⁽¹⁾）を用いた。
 - (2) 『修正律呂新書』には、上欄に校記が見えるが、それらについては「校記」に「修正本眉批云」として示した。
 - (3) 『律呂新書』の冒頭に収載された、朱熹による序文のみ、朱子の別集との校勘も行った。校勘に用いたテキストは、『晦庵先生朱文公文集』（『四部叢刊』所収 上海涵芬楼藏嘉靖中刊本景印。「朱子文集」と略す）である。
2. 『筆記律呂新書説』
 - (1) 『筆記律呂新書説』には、上欄や行間に、後世における書き込み見えるが、そのうち校勘にかかわるものについては「校記」に示した。その際、底本に見える中村習斎によると思われるものについては「習齋云」とし、対校本にも共通して見えるものについては、その旨を明記した。また、対校本のみに見えるものについては、重要と判断されるもののみを示した。
 - (2) 『筆記律呂新書説』の校勘については、以下の諸本を対校本として用いた。

小浜市立図書館酒井家文庫蔵、順造館（小浜藩藩校）旧蔵（「順本」と略す）

番号「七六八―二二四」題簽「筆記律呂」印記「順造館蔵書記」

慶応義塾図書館蔵（「慶本」と略す）

番号「一八四―一九」題簽「律□□□筆記」印記「岡澤寄附」・「岡澤蔵書」・「慶應義塾図書館印」・「□□□文」（題簽と印記の

「□」は欠損、または不鮮明な文字を表す）

国立国会図書館蔵、杉原心斎（？―一八六八）旧蔵（「心本」と略す）

番号「一〇二―一五九」題簽「筆記律呂新書説」印記「島田翰読書記」・「心斎」・「緑静堂図書章」・「帝国図書館蔵」

東北大学附属図書館狩野文庫蔵（「狩本」と略す）

番号「第五門三〇二五〇―一冊」題簽「筆記律呂新書説」印記「東北帝国大学図書印」・「東北帝国大学図書」

東北大学附属図書館狩野文庫蔵、明德館（秋田藩藩校）旧蔵（「明本」と略す）

番号「第五門一六八四五―三冊」題簽「筆記律呂」印記「東北帝国大学図書印」・「明德館図書章」・「荒井泰治氏ノ寄附金ヲ以テ購

入セル文学博士狩野亨吉氏旧蔵書」・「狩野氏図書記」・「揆軒進藤氏図書記」

日本学士院蔵、廣田顕三旧蔵（「学本」と略す）

番号「第七門一七 六九六七」「第四六六五号」「第二六五一号」題簽「筆記律呂新書説」印記「帝国学士院図書之印」

北海学園北駕文庫蔵（「北本」と略す）

番号「音楽二二」題簽「律呂新書」印記「語一樓蔵書」・「北海学園大学・北駕文庫・図書」（ただし、三巻のうち上中巻を存するのみ）

前田育徳会尊経閣文庫所蔵、昌平坂学問所旧蔵（「昌本」と略す）

番号「一六一五八」題簽「筆記律呂新書説」印記「経説子解」・「学問所改」・「前田氏尊経閣図書記」

宮城県図書館蔵、大槻平泉（一七七三―一八五八）旧蔵（「平本」と略す）

番号「M七六八―ヒ―一三・一―三・三」題簽「筆記律呂新書説」印記「宮城県図書館蔵書印」・「平泉」

以上のほかに、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター編『新潟県立新潟図書館漢籍分類目録 新発田市立図書館漢籍分類目録』（東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、一九八二年）に拠ると、新発田市立図書館所蔵本があるが、二〇一二年十一月現在、所在不明である。

3. 校勘の原則

(1) 『律呂新書』・『筆記律呂新書説』共通

イ、底本に誤りがあり、対校本が正しいと判断した場合には、原則として、対校本によって底本の原文を改め、その旨を〔校記〕に明記する。

ロ、底本と対校本が異なり、その優劣の判断が難しい場合には、原則として、底本に従い、〔校記〕に文字の異同を明記する。

ハ、底本・対校本ともに誤りがあると判断した場合、原則として、底本の原文を改め、その根拠等を〔校記〕に明示する。

ニ、底本が疑わしくも、正誤の判断が難しい場合には、原則として、底本に従い、〔校記〕にその旨を明記する。

ホ、原文における引用文が、通行の原典資料と異なる場合には、原則として、〔校記〕には示さず、底本も改めない。ただし、その異同によって、原文の解釈に支障を来す恐れのある場合に限り、原典に従って文字を改め、〔校記〕に明記する。

(2) 『律呂新書』

底本（修正本）と対校本（『性理大全』・序文のみ『朱子文集』）との文字の異同については、原則として、異体字を除き、その程度の差にかかわらず〔校記〕に明記する。

(3) 『筆記律呂新書説』

イ、底本と対校本の差異がわずかである場合（例えば、同義語、類義語等）には、原則として、底本に従い、〔校記〕にも明記しない。

ロ、底本が正しく、対校本に誤りがあると判断した場合には、原則として、そのまま底本に従い、〔校記〕にも示さない。

ハ、(1)の「ホ」に示したとおり、原文の引用文については、原典資料との校勘は行わないのが原則であるが、本稿（二）で扱う範囲のうち、「朱子曰」から「不盡載也」まで（『朱子文集』・『朱子語類』・黄瑞節説からの引用とされる箇所）は、実際には、すべて『性理大全』からの孫引きと考えられるため、『律呂新書』本文に準じて、原則(2)に従い、『性理大全』との校勘も行う。ただし『朱子文集』・

『朱子語類』等との校勘は、(1)の「ホ」の原則どおり行わない。

六、訓読の方針

1. 『律呂新書』・『筆記律呂新書説』共通

- (1) 丸括弧（ ）内に、書名・人名・生没年・現在の地名・西暦等を適宜補った。
- (2) 原文における小字双行注は、山括弧へゝに入れて示した。

2. 『律呂新書』

- (1) 訓点は、底本に施されたものを可能な限り尊重したが、表記については、現在一般に広く行われている訓読法に適宜改めた。
例・為^す↓為^なす　まく欲す↓せん^と欲す　猶を↓猶ほ
- (2) 底本には、送り仮名に省略が見えるため、それらについては、文脈を踏まえて、適宜補った。
- (3) 底本は、句点・読点の区別が厳密でないため、それらについては、文脈を踏まえて、適宜改めた。
- (4) 振り仮名については、底本にもともと付されたものは、カタカナで示し、校注者が、文意や送り仮名等によって補ったものについては、ひらがなで示した。

3. 『筆記律呂新書説』

学本・慶本・狩本・明本には、訓点が部分的に施されており、それらを適宜参照したが、誤りが多いため、必ずしもそれらに従ったわけではない。

七、出典考証について

「校勘の原則」で示したとおり、引用文献については、原則として、原典と『律呂新書』・『筆記律呂新書説』における引用文との異同を逐一検討することはしない。ただし、本稿(二)における、『筆記律呂新書説』に引用された陳仁錫(一五八一—一六三六)の『皇明世法録』に関しては、「註」として出典を示した。その理由は、以下のとおりである。

『皇明世法録』卷二十三・二十四「樂律」は、その大部分が、王邦直（一五一三—一六〇〇）『律呂正声』からの抜粹であり、今回、『筆記律呂新書説』において「世法録」として引用されている個所も、すべて『律呂正声』の文であるが、この『律呂正声』の文自体が、実は樂律に関する様々な資料をつなぎ合わせて作られたものである。文意の正確な理解のために、それぞれの出所と文脈を明らかにする必要があると判断し、出典を示すこととした。

〔註〕

- (一) 所蔵機関によって、請求番号・整理番号・配架番号等、様々な名称で呼ばれているため、本稿では、便宜的に「番号」と表記し、文献本体や目録に記載された番号を示した。以下、同じ。
- (二) 本書は影印本であるが、底本が明記されていない。書影より、明内府刻本の影印と考えられる。

本文

修正律呂新書

律呂新書序

古樂之亡久矣。然秦漢之間去周未遠，其器與聲猶有存者。故其道雖不行於當世，而其爲法猶未有異論也^(一)。逮于東漢之末，以接西晉之初，則已浸多說矣。歷魏、周、齊、隋、唐五季，論者愈多，而法愈不定。爰及我朝，功成治定，禮宜有作^(二)。建隆、皇祐、元豐之間，蓋亦三致意焉。而和、胡、阮、李、范、馬、劉、楊諸賢之議，終不能以相一也。而況於崇、宣之季，姦諛之會，黷涅之餘，而能有以語夫天地之和哉。丁未南狩，今六十年，神人之憤，猶有未攄，是固不遑於稽古禮文之事^(三)。然學士大夫因仍簡陋，遂無復以鐘律爲意者^(四)，則已甚矣。

吾友建陽蔡君元定季通，當此之時，乃獨心好其說而力求之。旁搜遠取，巨細不捐，積之累年，乃若冥契。著書兩卷，凡若干言。予嘗得而讀之。愛其明白而淵深，縝密而通暢，不爲牽合傳會之談，而橫斜曲直，如珠之不出於盤。其言雖

多出於近世之所未講，而實無一字不本於古人已試之成法。蓋若黃鐘圍徑之數^(五)，則漢斛之積分可攷^(六)；寸以九分爲法，則淮南、太史^(七)、小司馬之說可推；五聲二變之數，變律半聲之例，則杜氏之通典具焉；變宮變徵之不得爲調，則孔氏之禮疏因亦可見。至於先求聲氣之元，而因律以生尺，則尤所謂卓然者，而亦班班雜見於兩漢之制^(八)、蔡邕之說與夫國朝會要，以及程子、張子之言。顧讀者不深考，其間雖或有得於此^(九)，而又不能無失於彼。是以晦蝕紛拏，無復定論。大抵不拘鑿於習熟見聞之近，卽肆其胸臆，妄爲穿穴而無所據依。季通乃能奮其獨見，超然遠覽，爬梳剔抉，參互攷尋^(一〇)，用其半生之力^(一一)，以至於一旦豁然而融會貫通焉。斯亦可謂勤矣。及其著論，則又能推原本根，比次條理，撮取機要^(一二)，闡究精微，不爲浮詞濫說以汨亂於其間，亦庶幾乎得書之體者。

予謂國家行且平定中原，以開中天之運，必將審音協律，以諧神人。當是之時^(一三)，受詔典領之臣，能得此書而奏之，則東京郊廟之樂，將不待公孫述之誓師而後備，而參摹四分之書，亦無待乎後世之子雲而後知好之矣。抑季通之爲此書，詞約理明，初非難讀。而讀之者往往未及終篇，輒已欠伸思睡。固無由了其歸趣。獨以予之頑鈍不敏^(一四)，乃能熟復數過，而僅得其指意之彷彿^(一五)。季通於是亦許予爲能知己志者^(一六)。故屬予以序引，而予不得辭焉。季通更欲均調節族^(一七)，被之管絃^(一八)，別爲樂書，以究其業，而又以其餘力，發揮武侯六十四陳之圖^(一九)，緒正邵氏皇極經世之歷，以大備乎一家之言。其用意亦健矣。予雖老病，儻及見之^(二〇)，則亦豈非千古之一快也哉！淳熙丁未正月朔旦，新安朱熹序。

〔校記〕

- 〔一〕 而其爲法猶未有異論也 「未」下，朱子文集有「容」字。
- 〔二〕 禮宜有作 「禮」，朱子文集作「理」。修正本眉批云：「禮」，文集作「理」。
- 〔三〕 是固不違於稽古禮文之事 「違」，性理大全作「皇」。
- 〔四〕 遂無復以鐘律爲意者 「鐘」，朱子文集作「鍾」。
- 〔五〕 蓋若黃鐘圍徑之數 「鐘」，朱子文集作「鍾」。
- 〔六〕 則漢斛之積分可攷 「攷」，朱子文集作「考」。

- 〔七〕太史 「太」，原作「大」，據性理大全、朱子文集改。
- 〔八〕而亦班班雜見於兩漢之制 「制」，朱子文集作「志」。
- 〔九〕其間雖或有得於此 「此」下，朱子文集有「者」字。
- 〔一〇〕參互攷尋 「攷」，朱子文集作「考」。
- 〔一一〕用其半生之力 「半」，朱子文集作「平」。
- 〔一二〕撮取機要 「撮取」，朱子文集作「管括」。
- 〔一三〕當是之時 「是」，朱子文集作「此」。
- 〔一四〕獨以予之頑鈍不敏 「鈍」，性理大全作「頓」。
- 〔一五〕而僅得其指意之彷彿 「其」，朱子文集無此字。「彷彿」，性理大全作「仿佛」。
- 〔一六〕季通於是亦許予爲能知己志者 「於」，朱子文集作「以」。
- 〔一七〕季通更欲均調節族 「族」，朱子文集作「奏」。
- 〔一八〕被之管絃 「管」，朱子文集作「箎」。「絃」，性理大全作「弦」。
- 〔一九〕發揮武侯六十四陳之圖 「陳」，朱子文集作「陣」。
- 〔二〇〕儻及見之 「儻」，性理大全作「黨」。

〔訓誥〕

古楽の亡びたること久し。然れども秦漢の間、周を去ること未だ遠からず、其の器と声と、猶ほ存する者有り。故に其の道、当世に行はれずと雖も、而も其の法たること猶ほ未だ異論有らず。東漢の末より、以て西晋の初めに接するに逮びては、則ち已に浸やく説多し。魏・周・齊・隋・唐五季を歴て、論ずる者愈々多くして、法愈々定まらず。爰に我が朝に及びて、功成り治定まりて、礼宣作おること有り。建隆（九六〇—九六三）・皇祐（一〇四九—一〇五四）・元豊（一〇七八—一〇八五）の間、蓋し亦た三たび意を致せり。而るに和（和峴、九三三—九三八）・胡（胡瑗、九九三—一〇五九）・阮（阮逸、生没年不詳）・李（李照、生没年不詳）・范（范鎮、一〇〇八—一〇八八）・馬（司馬光、

一〇一九—一〇八六）・劉（劉几、一〇〇八一—一〇八八）・楊（楊傑、生没年不詳）の諸賢の議、終に以て相一なること能はず。而るを況んや崇宣の季・姦諛の会・黥涅の余に於いて、能く以て夫の天地の和を語ること有らんや。丁未（一一二七）に南狩して、今六十年、神人の憤、猶ほ未だ攄びざること有り、是れ固に古の礼文の事を稽ふるに違あらず。然れども学士・大夫、因仍簡陋にして、遂に復た鐘律を以て意と為す者無きは、則ち已甚し。

吾が友、建陽（現在の福建省建陽）の蔡君元定、季通、此の時に当たりて、乃ち獨り心に其の説を好みて、力めて之を求む。旁く搜り遠く取りて、巨細捐てず、之を積むこと累年にして、乃ち冥契するがごとし。書を著すこと兩卷、凡て若干言。予嘗て得て之を読む。其の明白にして淵深、縝密にして通暢、牽合傳会の談を為さずして、横斜曲直、珠の盤を出でざるがごとくなることを愛す。其の言多く近世の未だ講ぜざる所に出づと雖も、而も実に一字も古人已に試むるの成法に本づかざること無し。蓋し黃鐘罍徑の数のごときは、則ち漢斛の積分攷ふべし、寸、九分を以て法と為すことは、則ち『淮南』（『淮南子』）・太史（司馬遷、前一四五—前八六）・小司馬（司馬貞、生没年不詳）の説推すべし、五声二変の數、變律半声の例は、則ち杜氏（杜祐、七三五—八一二）の『通典』具はれり、變宮・變徵の調たることを得ざるは、則ち孔氏（孔穎達、五七四—六四八）の『礼疏』（『礼記』「礼運」疏）因りて亦た見るべし。先づ声氣の元を求めて、律に因りて以て尺を生ずるに至りては、則ち尤も所謂卓然たる者にして、亦た班班として兩漢の制・蔡邕（二三三—一九二）の説と、夫の『国朝の会要』とに雜り見えて、以て程子（程頤、一〇三二—一〇八二・程顥、一〇三三—一〇七）の言に及ぶ。顧みるに読む者深く考へず、其の間或いは此れに得ること有りと雖も、而も又彼に失ふこと無きこと能はず。是を以て晦蝕紛拏して、復た定論無し。大抵、習熟見聞の近きに拘攀せざれば、即ち其の胸臆を肆まにし、妄に穿穴することを為して抛り依る所無し。季通乃ち能く其の独見を奮ひ、超然として遠く覽、爬梳剔抉し、参互考尋して、其の半生の力を用ひて、以て一旦豁然として融會貫通するに至れり。斯れ亦た謂ふべし、勤たりと。其の論を著すに及びては、則ち又能く本根に推し原づけ、条理を比べ次で、機要を撮み取り、精微を闡らめ究め、浮詞濫説を為りて以て其の間に汨乱せず、亦た書の体を得る者に庶幾し。

予謂らく国家行且中原を平定して、以て中天の運を開かば、必ず將に音を審らかにし律を協へて、以て神人を諧げんとせん。是の時に當りて、詔を受けて典領するの臣、能く此の書を得て之を奏せば、則ち東京の郊廟の樂、將に公孫述（？—三六）の瞽師を待たずして後に備はり、而して参摹四分の書も、亦た後世の子雲（揚雄、前五三—一八）を待つこと無くして後に之を好むことを知らんとせん。抑々季通の此の

書を為る、詞約まやかに、理明らかにして、初めより読み難きに非ず。而れども之を読む者、往往未だ篇を終ふるに及ばずして、輒ち已に欠伸して睡らんことを思ふ。固に其の帰趣を了するに由無し。独に予が頑鈍不敏なるを以て、乃ち能く熟復数過して、僅かに其の指意の彷彿たることを得たり。季通是に於いて亦た予に許して、能く己が志を知る者と為す。故に予に属するに序引を以てして、予辞することを得ず。季通更に節族を均調して、之を管絃に被らしめ、別に楽書を為りて、以て其の業を究め、而して又其の余力を以て武侯（諸葛亮、一八一—二三四）の六十四陳の図を發揮し（『八陣図説』）、邵氏（邵雍、一〇一一—一〇七七）の『皇極經世』の歴を緒正して（『皇極經世指要』）、以て大いに一家の言を備へんと欲す。其の意を用ふること亦た健なり。予、老病せりと雖も、儻し之を見るに及ばば、則ち亦た豈に千古の一快に非ざらんや。淳熙丁未（一一八七）正月朔旦、新安（現在の江西省婺源）の朱熹序す。

筆記律呂新書説

筆記律呂新書説上

序

建隆、皇祐、元豐之間、和、胡、阮、李、范、馬、劉、楊諸賢之議^(一)

欽按：宋太祖建隆中、判太常寺和峴承詔議樂律。自仁宗皇祐至神宗元豐之間、胡瑗、阮逸、李照、范鎮^(二)、司馬光、

劉几、楊傑等相繼與樂議。

崇、宣之季、姦諛之會、黥涅之餘

崇寧、宣和爲徽宗之季世。姦諛之會、指時相蔡京、太司樂劉昺等。黥涅之餘、是方士魏漢津。漢津以帝指寸制律成樂。所謂太晟樂是也^(三)。【語類九十二：「徽宗時、一黥卒魏漢津造雅樂一部、皆杜撰也。今太學上丁用者、是此樂。」】

漢斛之積分、淮南、太史、小司馬之說、杜氏之通典、孔氏之禮疏

漢斛說見本書下篇。漢劉安淮南子、太史公律書、唐司馬貞史記索隱。貞世稱小司馬。唐杜佑通典、孔穎達禮運正義。

國朝會要

《文獻通考》云：「三朝國朝會要一百五十卷。」晁氏曰：「皇朝章得象，天聖中，被詔以國朝故事，因革制度編次。」六朝國朝會要三百卷。晁氏曰：「神宗朝以會要止於慶曆，命王珪續之。起於建隆之元迄于熙寧十年，通舊書增損成是書。」

爬梳剔抉^(五)

謂爬梳紛亂者，剔抉固結者。韓文云：「爬羅剔抉，刮垢磨光。」

公孫述之瞽師

《後漢光武紀》：「建武十三年，益州傳送公孫述瞽師、郊廟樂器、葆車、輿輦，於是法物始備。」

參摹四分之書^(六)

按：此指太玄經。漢楊雄傳：「大潭思渾天，【漢書註云：「潭，深也。渾天，天象也。」參摹而四分之。】蘇林注云：「三析而四分天之宿度甲乙也。」

待後世之子雲

韓文與馮宿論文書云：「昔楊子雲著太玄，人皆笑之。子雲之言曰：「世不我知，無害也。後世有楊子雲，必好之矣。」子雲死近千載。竟未有楊子雲，可歎也。」楊子本語未考所出。

節奏

族，去聲。與「蕨」通。太蕨之蕨。《漢志注云：「奏也。」《大學衍義補引此序亦作「節奏」。

【此一條見于文集跋蔡神與絕筆。】朱子曰：「蔡神與，名發，博學強記，高簡廓落，不能與世俗相俯仰。因去遊四方，聞見益廣。遂於易象、天文、地理三式【三式，天、地、人。】之說，無所不通，而皆能訂其得失。杜門掃軌，專以讀書教子爲事，季通生十年，即使讀西銘。稍長，則示以程子語錄、邵子經世、張子正蒙，而語之曰：「此孔孟正脈也。」季通承厥志，學行之餘，尤邃律曆，討論定著，遂成一家之言，使千古之誤，擴然一新。而溯其源流，皆有成法。是亦足以顯其親於無窮矣。」

【此二條，語類樂部。】○季通律書法度甚精^(二四)，近世諸儒皆莫能及。○季通律書不是臆說^(二五)，自有按據。

【按：黃說見大全。】黃氏瑞節曰：「律呂書，蓋朱、蔡師弟子相與成之者。朱子與西山書云：『但用古書古語或注疏，而已意附其下方。甚簡約而極周盡。學者一覽，可得梗概。其他推說之泛濫、旁證之異同^(二六)，不盡載也。』」

○又瓊山丘氏曰：「此書之作，雖由蔡氏，而皆本其師也。觀朱氏與元定書曰：『但用古書古語云云。』今即其書以觀，無一不如其師所教者，所謂「甚簡約而極周盡」者，一言以蔽之矣。」

鐘律名義

呂氏春秋曰：「昔黃帝令伶倫作律。又命伶倫與榮將鑄十二鐘，以和五音。」蔡邕月令章句曰：「律，率也，聲之管也。上古聖人本陰陽，別風聲，審清濁，而不可以文載口傳也。於是始鑄金作鐘，以主十二月之聲，然後以效升降之氣，鐘難分別，乃截竹爲管，謂之律。」臨川吳氏曰：「十二鐘之聲由律而起，十二律之名則由鐘而得也^(二七)。」

陳仁錫世法錄云：「律呂之義^(一)，諸家之說不同。爾雅曰：「律謂之分」，郭璞註云：「律管所以分氣者也。」春秋元命苞曰：「律之爲言率也。所以率氣令達也。」注云：「率，猶導也。」蔡邕月令注曰：「律，率也，聲之管也。截竹爲管曰律，爲清濁之率也。」一曰：「律，法也，言陽氣與陰氣爲法^(二)。呂，侶也，言陰爲陽之侶也^(三)。總言陰陽皆稱律，故謂之十二律^(四)。」一曰：「律，述也。所以述陽氣也^(五)。呂，助也。言陰氣助陽宣氣^(六)。以其皆述陽氣，而上下通焉。所以均謂之十二律也^(七)。」是故十二月^(八)，分陰陽，陰陽各六月，是以聲音之器十二鐘，鐘當一月，六鐘陰聲，六鐘陽聲。聲之術律是而出，故謂之六律。不言呂者，陽統陰也^(九)。六律亦謂之六始^(一〇)，始六陰也。六呂謂之六間，間六陽也。亦謂之六同，同六陽也。然陽盡變以造始^(一一)，故每律異名。陰體常以爲法，故止於三鐘三呂而已。」

○卽墨王邦直曰：「釋名云^(一二)：古律用竹，又用玉，漢末以銅爲之。以銅爲物之至精^(一三)。不爲燥濕寒暑變其節，不爲風雨暴露改其形，介然有常，有似於士君子之行。故凡律度量衡用銅者，所同天下，齊風俗也。」世法錄

〔校記〕

〔一〕 楊諸賢之議 「諸賢」，原脫，據律呂新書補。

- 〔三〕 范鎮 習齋云：「鎮」一作「慎」。按：性理大全集覽作「慎」。
- 〔三〕 所謂太晟樂是也 「太晟」，雖似作「大晟」是，然諸書「太」「大」雜出，今不改。
- 〔四〕 通舊書增損成是書 「成」，原脫，據北本、昌本、明本、平本、慶本、狩本、順本、心本、學本及文獻通考補。
- 〔五〕 爬梳紛亂 「梳」，原作「疏」，據律呂新書改。下同。
- 〔六〕 參摹四分之書 「參」，原作「三」，據律呂新書改。
- 〔七〕 三折而四分天之宿度甲乙也 「折」，原作「析」，據漢書百衲本、武英殿本、金陵書局本改。「天」，原脫，據漢書補。習齋云：「分」「之」之間本有「天」字。」
- 〔八〕 即使讀西銘 「卽」下，性理大全有「教」字。
- 〔九〕 程子語錄 「子」，性理大全作「氏」。
- 〔一〇〕 邵子經世 「子」，性理大全作「氏」。
- 〔一一〕 張子正蒙 「子」，性理大全作「氏」。
- 〔一二〕 尤邃律曆 「曆」，性理大全作「歷」。
- 〔一三〕 擴然一新 「擴」，性理大全作「曠」。
- 〔一四〕 季通律書法度甚精 「書」，原作「呂」，據北本、昌本、明本、平本、慶本、狩本、順本、心本、學本及性理大全改。
- 〔一五〕 季通律書不是臆說 「書」下，性理大全有「分明是好却」五字。
- 〔一六〕 旁證之異同 「證」，性理大全作「正」。
- 〔一七〕 十二律之名則由鐘而得也 「律」，原作「鐘」，據吳澄黃鍾仲律字說改。習齋云：「十二鐘」當作「十二律」。

〔註〕

① 「律呂之義」至「故止於三鐘三呂而已」按：此段係陳仁錫轉引王邦直律呂正聲。

② 「律法也言陽氣與陰氣爲法」禮記月令孔穎達疏：「陽管爲律，律，法也，言陽氣與陰氣爲法，鄭云：「律，述也，述氣之管。」陰管爲

呂。《律歷志》云：「呂，助也。言助陽宣氣。」又云：「呂，拒也。言與陽相承，更迭而至。」又陰律稱同，言與陽同也。總而言之，陰陽皆稱律，故十二月皆云「律中」是也。」

③「呂侶也言陰爲陽之侶也」《通典》樂三注：「十二月之時，陽方生育之功，其道廣大，故謂之大呂。呂者，侶也，言與陽爲侶，對生萬物。」

④「總言陰陽皆稱律故謂之十二律」《禮記》月令孔穎達疏。見註②。

⑤「律述也所以述陽氣也」《史記》律書索隱：「按：律有十二。陽六爲律，黃鍾、太簇、姑洗、蕤賓、夷則、無射；陰六爲呂，大呂、夾鍾、中呂、林鍾、南呂、應鍾是也。名曰律者，釋名曰：「律，述也，所以述陽氣也。」《律曆志》云：「呂，旅，助陽氣也。」案：古律用竹，又用玉，漢末以銅爲之。呂亦稱間，故有六律、六間之說。元間大呂，二間夾鍾是也。」

⑥「呂助也言陰氣助陽宣氣」《禮記》月令孔穎達疏引律曆志。見註②。

⑦「以其皆述陽氣而上下通焉所以均謂之十二律也」《陳陽樂書卷四十六》：「六律謂之六始，始六陰也。六呂謂之六間，間六陽也。亦謂之六同，同六陽也。律呂言其體，始言其用，間言其位，同言其情。總而論之，皆述陽氣而通上下焉。所以均用之十二律也。」《陳陽樂書卷一百》：「六律謂之六始，其位始乎陰也。六呂謂之六間，其位間乎陽也。亦謂之六同，其情同乎陽也。分而言之則然。合而論之，皆述陽氣而上下通焉。此所以均謂之十二律也。」

⑧「是故十二月」至「故謂之六律」《新書》六術：「六者非獨爲六藝本也，他事亦皆以六爲度。聲音之道，以六爲首，以陰陽之節爲度，是故一歲十二月分而爲陰陽，各六月，是以聲音之器十二鍾，鍾當一月，其六鍾陰聲，六鍾陽聲，聲之術律是而出，故謂之六律。」

⑨「不言呂者陽統陰也」《蔡沈書集傳》益稷：「六律，陽律也。不言六呂者，陽統陰也。有律而後有聲，有聲而後八音得以依據，故六律、五聲、八音，言之敘如此也。」

⑩「六律亦謂之六始」至「同六陽也」《陳陽樂書卷四十六》。見註⑦。

⑪「然陽盡變以造始」至「故止於三鍾三呂而已」《陳陽樂書卷一百》：「然陽盡變以造始，故每律異名。陰體常以效法，故止於三鍾三呂而已。」

⑫「釋名云」至「漢末以銅爲之」《史記》律書索隱。見註⑤。

⑬ 「以銅爲物之至精」至「所同天下齊風俗也」〔漢書律曆志上：「凡律度量衡用銅者，名自名也，所以同天下，齊風俗也。銅爲物之至精，不爲燥濕寒暑變其節，不爲風雨暴露改其形，介然有常，有似於士君子之行，是以用銅也。用竹爲引者，事之宜也。」〕

〔訓詁〕

筆記律呂新書説上

序

「建隆・皇祐・元豐之間」「和・胡・阮・李・范・馬・劉・楊諸賢之議」

欽（中村楊齋）按ずるに、宋の太祖（在位九六〇―九七六）の建隆中、判太常寺和峴、詔を承けて樂律を議す。仁宗（在位一〇二二―一〇六三）の皇祐より神宗（在位一〇六七―一〇八五）の元豐に至るまでの間、胡瑗・阮逸・李照・范鎮・司馬光・劉几・楊傑等相繼ぎて樂議に与る。

「崇・宣之季、姦諛之会、黥涅之余」

崇寧（一一〇二―一一〇六）・宣和（一一一九―一二二五）は徽宗（在位一一〇〇―一二二五）の季世たり。「姦諛の会」は、時相蔡京（二〇四七―一二二六）・太司樂劉昂（生没年不詳）等を指す。「黥涅之余」は、是れ方士魏漢津（生没年不詳）なり。漢津、帝の指の寸を以て律を制し樂を成す。所謂「太晟樂」是れなり。【語類（朱子語類）九十二に「徽宗の時、一黥卒魏漢津、雅樂一部を造るも、皆杜撰なり。今、太学上丁に用ふる者は是れ此の樂なり」と。】

「漢斛之積分」「淮南・太史・小司馬之説」「杜氏之通典」「孔氏之礼疏」

「漢斛」は、説、本書下篇に見ゆ。漢の劉安（前一七九―前一二二）の『淮南子』・太史公の『史記』の「律書」・唐の司馬貞の『史記索隱』。貞は、世に小司馬と称せらる。唐の杜佑の『通典』・孔穎達の（『礼記』の）「礼運」正義。

「国朝会要」

『文献通考』（卷二百一「経籍二十八」）に云ふ、「三朝国朝会要」一百五十卷。晁氏（晁公武、約一一〇五―一一八〇）曰はく、「皇朝の章得象（九七八―一〇四八）、天聖（一〇二三―一〇三三）中、詔を被りて、国朝の故事・因革の制度を以て編次す」と。『六朝国朝会

要』三百卷。晁氏曰はく、「神宗の朝、『会要』の慶曆（一〇四一—一〇四八）に止まるを以て、王珪（二〇一九—一〇八五）に命じて之に続けしむ。建隆の元より起こりて熙寧十年（一〇七七）に迄るまで、旧書に通じ増損して是の書を成す」と。

「爬梳剔抉」

紛乱する者を爬梳し、固結する者を剔抉するを謂ふ。韓（韓愈、七六八—八二四）文（『進学解』）に云ふ、「爬羅剔抉して、垢を刮り光を磨く」と。

「公孫述之瞽師」

『後漢（後漢書）』の「光武紀」に、「建武十三年（三七）、益州より、公孫述の瞽師・郊廟の楽器・葆車・輿輦を伝送し、是に於いて法物始めて備はる」と。

「参摹四分之書」

按ずるに、此れ『太玄経』を指す。『漢（漢書）』の「楊雄伝」に、「大いに思ひを渾天に渾くし、【『漢書』の註に云ふ、「渾」は、深なり。「渾天」は、天象なり」と。】参摹して之を四分す」と。蘇林（生没年不詳、後漢末魏初在世）の注に云ふ、「三析して天の宿度甲乙を四分するなり」と。

「待後世之子雲」

韓（韓愈）文の「馮宿（七六七—八三六）に与へて文を論ずる書」に云ふ、「昔、楊子雲（揚雄）『太玄』を著し、人皆之を笑ふ。子雲の言に曰はく、「世、我を知らざるも、害無きなり。後世、楊子雲有らば、必ず之を好まん」と。子雲死して千載に近し。竟に未だ楊子雲有らず。歎すべきなり」と。へ楊子の本語、未だ出づる所を考へず。へ

「節奏」

「族」は、去声なり。「族」と通ず。「太族」の「族」なり。『漢（漢書）志（律曆志上）』の注（「注」とするのは誤り）に云ふ、「奏なり」と。（丘濬、一四二〇—一四九五）『大学衍義補』（卷四十四「楽律之制下」）に引く此の序にも亦た「節奏」に作る。

【此の一条、『文集』（卷八十三）「蔡神与の絶筆に跋す」に見ゆ。】朱子曰はく、「蔡神与（二〇八九—一一五二）、名は尧、博学強記に

して、高簡廓落、世俗と相俯仰すること能はず。因りて去りて四方に遊び、聞見益々広し。遂に易象・天文・地理の三式【三式は、天・地・人なり。】の説に於いて、通ぜざる所無く、而して皆、能く其の得失を訂す。門を杜し軌を掃ひ、専ら書を読み子に教ふるを以て事と爲し、季通生れて十年にして、即ち『西銘』を讀ましむ。稍々長じて、則ち示すに程子（程頤・程顥）の『語録（河南程氏遺書）』・邵子（邵雍）の『経世（皇極経世）』・張子（張載）の『正蒙』を以てし、而して之に語りて曰はく、「此れ孔（孔子）・孟（孟子）の正脈なり」と。季通、厥の志を承けて、学行の余、尤も律曆に邃く、討論定著して、遂に一家の言を成し、千古の誤りをして、擴然として一たび新たならしむ。而して其の源流に遡りて、皆、成法有り。是れも亦た以て其の親を無窮に頭すに足れり」と。

【此の二条は、『語類』（卷九十二）の「楽部」なり（一条目は、『語類』ではなく『朱子文集』卷四十六「答詹元善」に見える）。】○季通の『律書』は、法度甚だ精しく、近世諸儒、皆、能く及ぶこと莫し。○季通の『律書』、是れ臆説ならず、自ら按拠有り。

【安（蟹養齋、名は維安、一七〇五—一七七八）按ずるに、黄（黄瑞節、生没年不詳）説は『大全（性理大全）』に見ゆ。】黄氏瑞節曰はく、『律呂書』は、蓋し朱・蔡師弟子相与に之を成す者なり。朱子の「西山に与ふる書」（『朱子文集』卷四十四「答蔡季通」）に云ふ、「但だ古書古語或いは注疏を用ひて、己が意を以て其の下方に附けよ。甚だ簡約にして極めて周尽ならん。学者一覽せば、梗概を得べし。其の他、推説の泛濫・旁証の異同は、尽くは載せざれ」と。

○又、瓊山（現在の海南省瓊山）の丘氏（『大学衍義補』卷四十四「楽律之制下」）曰はく、「此の書の作、蔡氏に由ると雖も、而れども皆、其の師に本づけり。朱氏の「元定に与ふる書」（『朱子文集』卷四十四「答蔡季通」）を觀るに曰はく、「但だ古書古語を用ひて云云」と。今、其の書に即して以て觀れば、一も其の師の教ふる所の者のごとくならざるは無し。「甚だ簡約にして極めて周尽」と謂ふ所の者、一言以て之を蔽へり」と。

鍾律名義『呂氏春秋』（『古楽』）に曰はく、「昔、黄帝、伶倫をして律を作らしむ。又伶倫と榮将とに命じて十二鐘を鑄て以て五音を和せしむ」と。蔡邕の『月令章句』（『後漢書』「律曆志上」）に引く）に曰はく、「律は、率なり。声の管なり。上古の聖人は、陰陽に本づき、風声を別ち、清濁を審らかにするも、而も以て文載口伝すべからざるなり。是に於いて始めて金を鑄て鐘を作り、以て十二月の声を主り、然る後に以て升降の氣を効すも、鐘は分別し難く、乃ち竹を截りて管を為り、之を律と謂ふ」と。臨川（現在の江西省撫州）の呉氏（呉澄、一二四九—一三三三、「黄鍾仲律字説」）に曰はく、「十二鐘の声は、律に由りて起こり、十二律の名は則ち鐘に由りて得たり」と。

陳仁錫（一五八一—一六三六）の『世法録（皇明世法録）』（卷二十三「樂律」）。王邦直（一五一三—一六〇〇）『律呂正声』卷三からの転引）に云ふ、「律呂の義、諸家の説、同じからず。『爾雅』（「積器」）に「律、之を分と謂ふ」と曰ひ、郭璞（二七六一—三二四）の註に云ふ、「律管は氣を分かつ所以の者なり」と。『春秋元命苞』（『太平御覽』卷十六「時序部一」）に引く）に「律の言たる、率なり。氣を率るて達せしむる所以なり」と曰ひ、注に云ふ、「率は、猶ほ導のごときなり」と。蔡邕の『月令注』（『太平御覽』卷十六「時序部一」に引く）に曰はく、「律は、率なり。声の管なり。竹を截りて管を為りて律と曰ひ、清濁の率と為すなり」と。一に曰はく、「律は、法なり。陽氣と陰氣とを法と為すを言ふなり。呂は、侶なり。陰は陽の侶たるを言ふなり。總じて言へば陰陽は皆律と称す。故に之を十二律と謂ふ」と。一に曰はく、「律は、述なり。陽氣を述ぶる所以なり。呂は、助なり。陰氣、陽を助け氣を宣ぶるを言ふなり。其の皆陽氣を述ぶるを以てして上下通ず。均しく之を十二律と謂ふ所以なり」と。是の故に、十二月、陰陽に分かたば、陰陽各々六月、是を以て声音の器十二鐘、鐘ごとに一月に当つれば、六鐘は陰声、六鐘は陽声、声の術は是れに律して出づ。故に之を六律と謂ふ。呂と言はざるは、陽の陰を統ぶればなり。六律亦た之を六始と謂ふは、六陰を始むればなり。六呂、之を六間と謂ふは、六陽を間つればなり。亦た之を六同と謂ふは、六陽に同じければなり。然れども陽は變を尽くして以て始めを造す。故に律毎に名を異にす。陰は常を体して以て法と為す。故に三鐘三呂に止まるのみ」と。

○即墨（現在の山東省即墨）の王邦直（『律呂正声』卷三）曰はく、「『積名』（『積名』とするのは誤り）に云ふ、古律、竹を用ひ、又玉を用ひ、漢末銅を以て之を為る。銅を以て物の至精と為せばなり。燥湿寒暑の為に其の節を變ぜず、風雨暴露の為に其の形を改めず、介然として常有り、士君子の行ひに似たる有り。故に凡そ律度量衡、銅を用ふる者は、天下を同じくし風俗を斉しくする所なり」と。
〔『世法録（皇明世法録）』（卷二十三）〕

（待続）

謝辞

貴重書の閲覧・撮影・複写等に関して便宜を図って下さった各所蔵機関、並びに翻刻掲載を許可して下さった名古屋市蓬左文庫に対して厚く御礼申し上げます。